

平成 21 年 6 月 19 日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2007～2008

課題番号：19791768

研究課題名 (和文) 高齢男性介護者の在宅介護の継続に向けた支援のあり方に関する研究

研究課題名 (英文) A study for support of elderly male caregivers who care at home

研究代表者

本田 亜起子 (HONDA AKIKO)

神奈川県立保健福祉大学・保健福祉学部・助教

研究者番号：90420695

研究成果の概要：

男性介護者における家事や介護の困難について明らかにすることを目的に、介護支援専門員を対象に調査を実施した。その結果、分析対象者 152 名のうち 9 割は介護者が男性であるケースを担当していた。多くの男性介護者は何らかの問題を抱えており、介護の問題は介護者の続柄によって差がみられることが示された。また、介護支援専門員は、男性介護者の問題に配慮している一方で、対応に苦慮していることが示唆された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	600,000	0	600,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1100,000	150,000	1250,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：高齢者、男性介護者、介護負担

1. 研究開始当初の背景

近年、夫婦のみ世帯の増加や、女性の有職率の増加などの影響により、これまで介護を担ってきた娘や嫁に代わり、夫や息子が介護を担うケースが増加している。

高齢男性の多くは、長年仕事を主体とする生活をしてきており、職業による時間的拘束が減少する高齢期においても家事役割の多くを妻が担っているため、介護に加えて家事が大きな負担となり、日常生活全体が危機に陥ることも少なくない。また、介護者自身も健康問題を抱

えていることが多く、介護疲れによる抑うつなども社会問題となっており、介護を担う男性への支援策を検討することは焦眉の課題といえる。

国外では、配偶者間の介護について、介護者の性差に関する研究が数多く行われており、妻介護者は、夫介護者と比較して介護負担感が大きく、抑うつを抱えており、一方、夫介護者は、妻介護者と比べて支援を多く受けていることが指摘されている (Yee, 2000)。

しかし国内では、これまで介護者のほとんど

を女性が占めていたため、近年になり介護者の性や続柄別に介護状況を検討した研究は見られるようになったが、男性介護者に焦点をあてた研究は緒についたばかりである。これらの先行研究では、夫介護者が介護役割を受け入れていくプロセスに関する研究（林，20003）や、夫介護者が介護に対して肯定的価値を見出しているものの、戸惑いや不安、抵抗感を感じていることを示した研究（一瀬，2002）など、介護者の心理的な側面に着目している。また、都市部の高齢夫婦のみ世帯の夫介護者を対象とした研究では、夫介護者が食事を作ることができないことによる食生活への影響や、食事を作ることによって慣れないことによる介護者の困難感などが問題点として明らかになった（本田，2007）。

男性介護者の介護負担を軽減し、介護者のQOLを維持するための支援を行うには、介護者の心理的な特徴のみならず、家事や介護を遂行する上で生じる問題点をさらに明らかにし、介護者の特徴をふまえた支援方法を検討することが必要である。

2. 研究の目的

本研究では、男性介護者が家事や介護に困難を感じている内容、それに対してどのような支援が必要とされるのかについて、介護支援専門員の視点から明らかにし、男性介護者が無理なく在宅介護を続けていくための支援のあり方について検討することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 対象

神奈川県A市の居宅介護支援事業所連絡協議会に所属する居宅介護支援事業所138施設に勤務する介護支援専門員を対象とし、回答が得られた152名を分析対象とした。

(2) 方法

郵送法による無記名自記式質問紙調査を実施した。調査期間は2008年12月である。

調査に先立ち、男性介護者に関わる介護支援専門員へのヒアリングを実施した。在宅で男性が介護をしているケースを担当している介護支援専門員を対象に、男性介護者が困難を感じている家事や介護の内容、今後必要だと考えるサービス内容、ケアマネジメントを行う際に留意している点等について尋ね、結果を参考に調査項目を作成した。

調査内容は、介護支援専門員が給付管理をしている利用者のうち介護者が男性である件数、男性介護者の抱える問題の内容、男性介護者に効果的と考えるサービス、男性介護者に対して配慮している点、男性介護者への対応に関する

困り事とその対応等である。本研究では、男性介護者の抱える問題を続柄別に明らかにするため、各調査項目について「夫介護者」「息子介護者」を分けてたずねた。

集計したデータの分析には、SPSS 15.0J for Windowsを用いた。

(3) 倫理的配慮

調査実施にあたり、研究の趣旨、研究の方法、個人情報保護等について依頼文書に明記し、調査票の返送をもって研究参加の同意とした。

なお、本研究は、研究者所属機関の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

4. 研究成果

(1) 介護支援専門員の基本属性

分析対象者 152 名のうち、女性 125 名 (82.2%)、男性 27 名 (17.8%) であり、対象者の 8 割以上が女性であった。

介護支援専門員としての実務経験は、平均 4.3 年であった。基礎資格は、介護福祉士が 90 名 (59.2%) と最も多く、次いでヘルパー 33 名 (21.0%) が多かった。勤務形態は、常勤が 125 名 (82.2%) であった。

2008 年 11 月末時点での給付管理件数は、平均 26.1 件であった。

(2) 男性介護者の担当件数

主な介護者が男性であるケースを担当しているのは 138 名 (90.8%) であり、一人あたりの担当件数は、平均 4.5 件であった。

主な介護者が男性であるケースを続柄別にみると、介護者が夫であるケースを担当しているのは 120 名 (87.0%)、息子は 110 名 (79.7%)、兄弟 19 名 (13.8%)、その他 8 名 (5.8%) であった。

(3) 男性介護者の介護困難

介護者が夫であるケースを担当する介護支援専門員に対し、夫介護者が抱えている問題をたずねたところ、「介護者自身も体調が悪い (78.3%)」、「介護を代わりにしてくれる人がいない (59.2%)」、「家事がうまくできない (57.5%)」、「介護がうまくできない (57.5%)」が多く挙げられた。

また、介護者が息子であるケースが抱えている問題として、「家事がうまくできない (59.1%)」、「介護がうまくできない (59.1%)」、「介護を代わりにしてくれる人がいない (58.2%)」、「近所づきあいがいない (47.3%)」が多く挙げられた (図 1)。

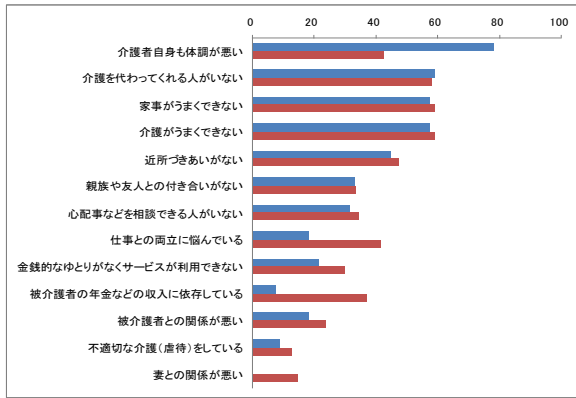


図1 男性介護者が抱える問題
(青：夫介護者、赤：息子介護者、数値は%)

夫介護者、息子介護者が困難に感じている家事・介護の内容としては、いずれも「食事の支度」、「排泄介助」、「入浴介助」が上位を占めていた(図2)。

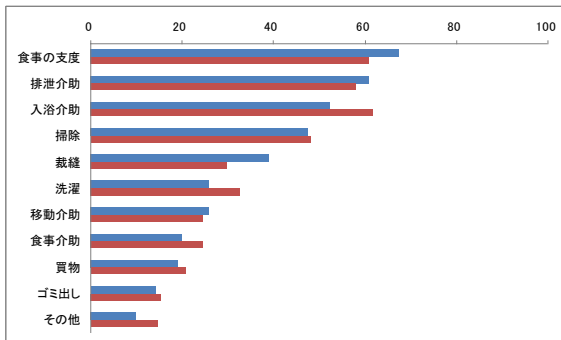


図2 困難に感じる家事や介護の内容
(青：夫介護者、赤：息子介護者、数値は%)

夫介護者に効果的と考えるサービスとして、「訪問介護」が最も多く、次いで「デイサービス・デイケア」が挙げられた。一方、息子介護者に効果的なサービスとしては「デイサービス・デイケア」が最も多かった(図3)。

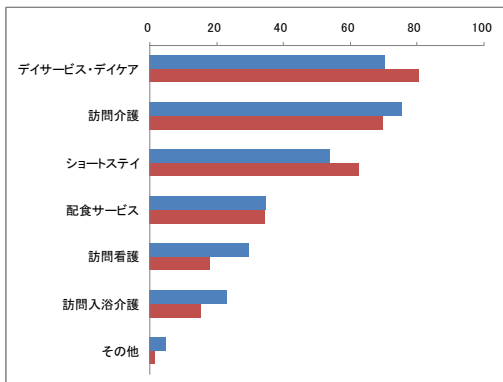


図3 男性介護者に効果的なサービス
(青：夫介護者、赤：息子介護者、数値は%)

(4) 男性介護者に対する介護支援専門員の対応

介護支援専門員が夫介護者に対して配慮している点としては、「介護をしていることをねぎらう(65.0%)」が最も多く、次いで「話し相手になる」であった。

一方、息子介護者に対しては、「仕事の都合に合わせて連絡を取る(70.0%)」が最も多かった(図4)。

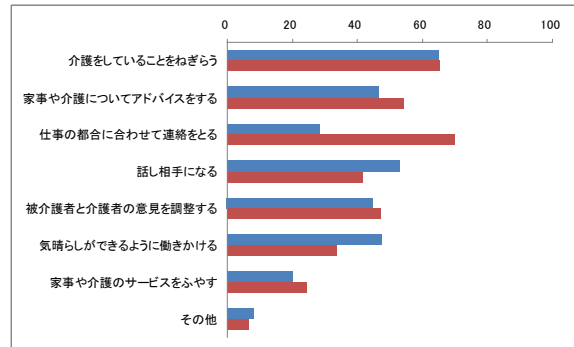


図4 男性介護者に配慮している点
(青：夫介護者、赤：息子介護者、数値は%)

また、介護支援専門員が男性介護者への対応に困難を感じる点を自由回答で尋ねたところ「思いが強く介護が自己流」、「サービス利用やアドバイスを拒否する」、「連絡が取りにくい」が多く挙げられた。

上記のような困難に感じる点に対し、介護支援専門員は、「話をよく聞く」、「何度も訪問し根気よく説明する」、「夜間・休日に訪問する」、「他の家族、他の職種と連携する」等の対応をしていた。

(5) 男性介護者の抱える問題と支援のあり方
本研究の結果から、分析対象者の9割は主介護者が男性であるケースを担当しており、男性介護者の多くは何らかの問題を抱えていることが示された。

食事の支度をはじめとする家事の問題や、排泄介助などの介護の問題は、介護者が困難を感じるだけでなく、被介護者が食事を十分にとれなかったり、適切な介護がなされなかったりする状況に陥る可能性もある。家事や介護の遂行が困難な男性介護者に対しては、家事や介護を円滑にすすめるためのサービスの活用を促すなどの支援が不可欠である。

また、介護支援専門員が捉えている男性介護者の問題は、介護者の続柄によって差が見られた。介護支援専門員は、男性が介護をしているケースのケアマネジメントを行うにあたり、続柄により異なる問題が生じる可能性があることをふまえてアセスメントを行い、

効果的なサービスの提供方法を模索していることが推察される。さらに、介護支援専門員は、男性介護者に対して様々なサービスを活用するほか、「介護をねぎらう」、「話し相手になる」などの配慮をしていた。しかし、男性介護者の介護の困難さに配慮する一方、連絡がとりにくかったり、サービスやアドバイスを拒否して介護を一人で抱え込んでいたりするような介護者への対応に苦慮していることも示唆された。

多くの男性にとって不慣れな家事や介護を円滑に遂行するための手段的な支援は、男性介護者に特有のニーズであり、かつ在宅介護の継続の可否にも影響する重要な支援といえる。男性介護者が家事や介護を遂行するにあたり、介護支援専門員の視点から明らかとなった問題に着目し、男性介護者の特性をふまえた支援を行うことが重要である。

今後は、男性介護者が在宅介護を無理なく継続していくために、困難を感じている内容に応じた具体的な支援策について、さらに検討していく必要があると考える。

<文献>

Yee JL, Shultz R. Gender differences in psychiatric morbidity among family caregivers: A review and analysis. *The Gerontologist* 40: 147-164, 2000

林葉子. 有配偶男性介護者による介護役割受入のプロセス. *家族研究年報* 28: 38-50, 2003

一瀬貴子. 高齢配偶介護者の介護経験の基本的文脈—介護の肯定的価値と介護による否定的影響のパラドックス—. *家政学研究* 49: 20-28, 2002

本田亜起子, 村嶋幸代. 高齢夫婦のみ世帯の夫介護者における食事の支度の困り事に関する研究. *日本地域看護学会誌* 10(1):93-99, 2007

5. 主な発表論文等

[学会発表] (計1件)

- ① 本田亜起子、介護保険サービス利用者の男性介護者における介護困難～介護支援専門員からみた問題に焦点をあてて～、日本地域看護学会 第12回学術集会、2009年8月9日(発表確定)、OVTA:海外職業訓練協会国際能力開発支援センター(千葉県)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

本田 亜起子 (HONDA AKIKO)

神奈川県立保健福祉大学・保健福祉学部・助教

研究者番号: 90420695

